

Town hall turns to timber in bid to save forestry

－林業を守るため、役所を木造に

山形県の中央部、人口約 13,000 人の白鷹町に新たな町役場が出現した。一昨年、この建物は 65%を森林が占めるこの町の林業をもう一度盛り上げるために建設された。

コンクリートや鉄筋で建設された建物が点在する中、この 4500 平方メートルのこの役場庁舎はほぼ木と柱と支える梁のみで建てられている。この建物には 1700 立方メートルの木材が使われ、その 75%はこの町において加工された杉である。また、建設には地元の業者が関わった。

格子状の荷重負荷の壁と 2 つの梁が建物じゅうに施され、木造にもかかわらず耐震性を備えている。延焼を防ぐため、それぞれの建物は耐火の石膏の壁により分かれている。

公の宣誓と近代的な発展を推し進めるため、新たな役場庁舎は図書館とコミュニティセンター、さらには役場庁舎の様々な課、会議室を一体にし、杉の香りの漂うものとなった。

この複合施設は 1960 年代の耐震性について課題のある自治体の施設に替わってきている。この庁舎の新設の計画は 2011 年の東日本大震災や大雨により引き起こされた洪水のあとに検討され始めたものであり、これにより森と木造建築の建物との関係を再考するきっかけとなった。

2013～2014 年の豪雨災害は、数トンの木材を流し、町にも大きなダメージを与えた。町長の佐藤誠七氏は「私たちがこの先林業を再興させなければ、このような災害は必ず繰り返される。」と言った。「私たちは適切に丸太を使い、植え、耕し、持続可能な森林のシステムが必要である。」

町民のこの計画に対する理解の向上により、町は地域住民を会議の席などに招き参加していただいた。新庁舎に招かれた 67 歳の白鷹町民はいくつかの新聞に取り上げられた際に「これは木がなんとも特別で驚くほどの温かみがある。とてもやさしく、快適だ。」といった。

この建物は、2020 年の国内の木造建築のコンテストにおいて内閣総理大臣賞を受賞した。町では徐々にほかの町の建物を木造に変えていく方向に向かっている。町はこう話す。「木造建築は長く続いていくものであり、修復の仕事やほかにも維持に係るこの町の受け入れ可能な業者が請け負っていく。林業はこの町の活性化を牽引するだろう」